

あれからもう一年。今でも忘れる事のできない昨年の六月下旬。

あの頃は毎日悪天候が続いていた。学校でも部落ごとくに帰らせてくれたので、私達は喜んで帰って来た。帰宅してからの事も知らずに……。

騒ぎ出したのは夕方頃からだった。鐘は鳴り、有線はしきりに怒鳴る。そのうちにお宮が崩れてしまった。それに引き続き、すごい音で人家がつぶれてしまいました。それから数分後、私の家へ近くの人が避難して来ました。でも電気は切れ、有線も切れ、ただ朝を待つばかりとなってしまいました。

私達はみんな一つ所に集まっていましたが、大人の人が、

「ここへ崩れてくりやあ、皆と一緒に死ぬんだでいい。」と言いだしました。

そのうちに、けたたましい雨の音と共に、石のごとごとと流れる音、岩が崩れる音が入り混って、私達をいっそう不安にしました。

「もう皆手をつなげ。死ぬ時は一緒だから。」

と言う大人の人の声に私達子供は、

「まだ死ぬのはいやだ。」と言いながら暗黒の中で泣いていました。

長い恐ろしい一夜が明け始めたころすごい音がしました。皆が悲鳴をあげ、あわただしく戸をあけると、腰も抜かさぬばかりに目の前に大木や家の屋根なんかがふつとんで来ているんです。私の家も危ないと言うのですぐ逃げました。でも皆どのようにして逃げたか、山崩れがした所と、今にも氾濫しそうな川に沿って行った時には、生きた気持ちはありませんでした。今考えてみると、よくあんな所が通れたと感心するほどの所です。

それから四、五日親類の家へ行っていました。家に帰ってからも雨の降るたびに逃げ回りました。

水田も半分以上流されてしまい、私はもちろん進学はあきらめていました。でも家の人はどうしても出してくれてくれるって言った時にはとても嬉しかったんです。それに私も行きたかったから……。でも皆ずつと勉強しているだろうし、今からでは遅いと思うと、行く気がしなくなりました。でも家の人、文通の友、又全国の友からのはげましの手紙に励まされ、苦しい困難を乗り越えたんです。母は毎晩夜食を運んでくれました。それに母が書いた詩を読んだんです。

“受験する子へ夜食を運び笑顔見てくる母の嬉しさ”——という詩を。

私がおもい落ちれば母がかわいそうだと思っただんです。一番一生懸命になつてくれたんだから……。

入試発表の時には家の人は一時間ほど前からラジオに耳を傾けていました。私はもう落ちるつもりで他の部屋にいたんですが、

「うかった。」と言って母が入ってきました。

その時の顔を今でも忘れることができません。私は信じられず、

「うかった？」と聞き返すほどでした。

そして母と手を取り合い、飛び上がって喜びました。うかったことはありがたかったんですが、これからの事を考えると暗い気持ちになるのです。

母は毎日、田ぶしんです。夕食の時などふと母の顔を見ると、小じわがふえたようです。それに、荒れた手。それを見た時、私には母がどれほど苦労しているかというところをつくづく感じさせられ、又母への感謝の気持ちが一層深まりました。

(中川村中川西中学校卒業 三十七年)